



九条フログはらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 3 2

2007(平成19)年8月6日(月)発行

<62年前の1945(昭和20)年8月6日(月)、午前8時15分、広島に原爆投下の日>

戦時中の私



戦時中の私・その走り書き

佐藤ヒロ子

小学四年の時、日米が開戦

小学校が国民学校に改められたのは、私が双葉郡新野小学校四年生のときであった。その年、昭和十六年の十一月、父の転勤で西白河郡矢吹国民学校へ転校した。そして一ヵ月後の十二月八日は日米開戦である。

汽車にゆられて矢吹の駅に着いたら、カーキ色の詰め襟を着た人が出迎えてくれた。案内されたところは、隣村の中畑にある福島県立矢吹修練農場であった。やがて父の服装も出迎えてくれた教官と同じくになって、毎朝、ゲートルを巻いて出勤するようになった。

朝は、五時に農場生(全員寄宿生)の起床ラッパで起こされた。まだ十四、五歳の子どもたちは、『起きろよ起きろ皆起きろ、起きないと場長さんにしかられる』と言いながらしぶしぶ起き上がるのだった。その後は、官舎の脇の道路を軍靴の音を響かせて駆け足行進するのが日課であった。また父の話では、その頃、県から満州開拓団の団長(村長)として赴任しないかと打診されたらしい。もし、そんなことに応じていたら私は残留孤児になっていたかも知れなかった。

入院中、郡山空襲を目撃

五年生になった私は、クラスの代表として月曜日の朝礼の前には、校長室の神棚を拜まされた。でも、ようやく慣れてきたのに一年半も経たないで、父が霊山青年道場に転勤になり、伊達郡霊山第一国民学校に転校した。

ここで私は盲腸炎を患い、福島の病院で手術をしたが経過が良くなくて三ヵ月以上入院することになってしまった。その間、空襲警報がしきりと鳴った。辺りは灯火管制で暗闇の時間を過ごしていたが、ある時、南の

空が赤々と明るく輝いていた。大人たちは「あれは郡山が燃えているんだ」と話し、またある時は、北の空が明るいとときがあり、「ああ、仙台が焼けている」と言っているのを聞いた。私は動けない体なのに、いつ福島が空襲されるのかと思つて不安な日々を送っていた。

目を疑いたい当時の通信箋の言葉

そんなわけで、当時、霊山第一国民学校でどんな教育を受けたかの、今はほとんど覚えてはいないが、当時の通信箋(左コビー)が残っているので紹介し、ご想像いただきたい。目を疑いたくなるような言葉が並んでいる。

次の年の五月、父に召集令状がきた。横須賀海兵団入団でしたが、入営したのは会津の山中で松の根っこを掘り、松根油を採るためであった。それで家族は福島市に移り、私は福島第二高女に入学した。

女学校で朝会するとき空襲に遭う

ある朝、二階の講堂で朝の会の最中、それはそれは物凄い爆音と爆風に見舞われた。窓ガラスは割れ、皆床に伏せて恐怖に

小学六年の佐藤さんの通信箋表紙。「滅私奉公」「忠君愛国」「子どもは天皇の子」というひどい内容です。しかし現在、こんな時代に戻そうとする勢力も強いのです。

戦いた。普通は警戒警報があつてから空襲されると思つていたのに、突然のことだった。後で聞いたことだが、渡利の田んぼに爆弾が落ちて田の草取りをしていた人が亡くなったということだった。

原町の空襲も目撃し、終戦を迎える

こんなことがあつて福島市は急に建物疎開を始めた。私は裁判所近くに住んでいたので立ち退きを命じられ、父の郷里石神村(現・原町区石神)に戻つて来たが、食物も

なく、乏しいまだランプ生活の農家だった。原町高等女学校に転入した夏、ここでも又、飛行場や原紡の爆撃を目にするこ

とになった。玉音放送があつたのはその数日後であった。(会員・原町区二見町在住)

8月15日の皇居前広場「玉音放送」によって日本の降伏を知らされた国民のなかには、皇居前広場にかけつけて、敗北を天皇にわびる者もあった。



通信箋

昭和十八年度

福島県伊達郡

霊山村第一国民学校

御家庭ノ皆様へ

○いよく決戦です。總力を挙げて敵の反攻を破砕せねばなりません。學校も思ひ切つた決戦教育を断行します。御協力下さい。
○私共の体は畏くも陛下の体です。土地も金も私の物ではない。御用となればすべてを捧ぐべきです。捧げる時が来たのです。
○勿論子供もわが子ではありません。立派に仕上げ、皆お國に捧げませう。學校はそのつもりで育てます。さびしく育てます。お家でもその決心でお勵まし下さい。

死んでしまったおれに

ジョー・オダネル撮影「焼き場にて、長崎」のために

おれだ

おれが写っている

と

写真を眼にした瞬間

国民学校初等科四年のおれだ

と

正面前方に視線を据えている

一文字に口を結んでいる

丸刈りの頭

指をびしっとそろえ

その中指は半ズボンの両脇の縫い目に添わせている

はだしの踵をそろえ

つま先びらきに立っている

おれたちがからだにたたき込まれた姿勢

へ気を付け」の姿勢

にはちがいないが

少年は上体をやや前傾させている

腰をわずかに折って

これは「へ礼」の姿勢だ

「へ礼」の姿勢の背中に弟

少年は弟を背負っている

背負い帯でしっかりと背負っている

弟は首をのけぞらせている

弟は兄の背中ですでに息絶えている

死んだ弟を背負った少年のまなざしを見たか

かなしみに耐えている少年のまなざしを見たか

かなしみに耐えつつ視線は前方に据えられている

かなしみに耐えつつ視線はなにに向けられているのか

なにに対しての「へ礼」なのか

地上に死があふれ

生と死が入りまじり

生と死とが背中あわせで

兄と弟とが一枚の布をさかいに

生と死とに別れ

兄と弟の生と死とが入れかわつても

死神はみずからのまぢがいに気づくはずもなく

地上に死者があふれ

折り重ね積みあげられ

死者は茶毘のほのおに包まれる

ほのおが少年の頬をほてらす

父や母であり兄弟であり友人であるかもしれないおびた

だしい死者たちへの

少年自身であるかもしれないおびただしい死者たちへの

「へ礼」は別れの挨拶である

かろうじて死をまぬがれた者からの挨拶である

少年は背負い帯をほどき

弟を背中からおろし

やがて

ほのおをあげて燃える弟を

少年自身であるかもしれない死者を

かなしみに耐えつつ記憶する

おれだ

十歳のおれが写っている

と

写真のなかの死者であるおれに対し

かろうじて生き残った者からの挨拶を返す

挨拶を返しつつ

半世紀を経たいまも

世紀を新しくするいまも

あの少年のかなしみが存在する地上の現実

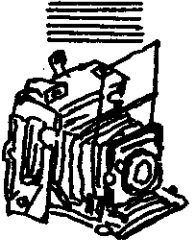
と

と

と

と

若松丈太郎（わかまつ じょうたろう）
1935年、若手県生れ。詩集「いくつもの川があつて」「越境する隣」。詩集
「新・現代詩」「いのちの箱」。福島県南相馬市に暮す。



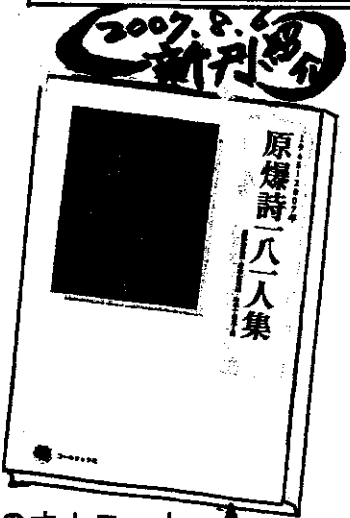
*ジョー・オダネル写真集「トランクの中の日本」(一九九五年六月)
○日・小学館) 九七ページ所収。一九四五年、終戦後の長崎、川岸
に設けられた遺体焼き場にやって来た、背中に死んだ幼い弟を背負っ
た十歳ほどの少年を撮影した写真。

死んだ弟を背負い焼き場で順番を待つ少年



▲アメリカ従軍カメラマンのジョー・オダネルの写真と、その添え書き
写真集「トランクの中の日本」小学館より

焼き場にて、長崎
この少年が死んでしまった弟をつれて焼き場にや
ってきたとき、私は初めて軍隊の影響がこんな幼
い子供にまで及んでいることを知った。アメリカ
の少年はとてこんなことはできないだろう。直
立不動の姿勢で、何の感情も見せず、涙も流さな
かった。そばに行つてなくさめてやりたいと思
つたが、それもできなかった。もし私がそうすれば、
彼の苦痛と悲しみを必死でこらえている力をくず
してしまふだろう。私はなす術もなく、立ちつく
していた。



▲今日8月6日発行される
「原爆詩一八一人集」(コ
ールサック社・¥2100)。
一九四五年の峠三吉から、
二〇〇七年までの百八十一
人の作品を収めていて圧巻で
す。この若松さんの詩も最後
のページに掲載されています。